

第4回宮古島文学賞選考評

もりおみずき

最終選考候補の8作品を受け取った時、こ  
とに今年は感じるが多かった。全世界の  
人々が閉ざされたような暗い時代を生きてい  
る今、南の青い海に浮かんだ小さな島の文学  
賞がかそけき光を四方に放ち、人々の生きる  
よすがのささやかなひとつになれればと願っ  
た。私の夢のような思いだった。  
まず選外となった作品について紹介したい。  
本当に短い感想にすぎないけれど、どんなに  
か思いを込めて作者が作品に向かつていたの  
かがひとと伝わって来たことを誰とも知らぬ  
作者の方に伝えたかった。  
順不同で紹介する。「不死王の島」は一人  
の老人の巧みな語りで進み、不死王とはい  
う謎解きで作品は終わる。誰一人として幸せ  
に出会うことのない暗く悲しい作品だった。  
「神歌由来」の文体と描写力には圧倒された。  
いつの時代か、ある島の、ヒトならぬケモノ

「ならぬ」大神と恐れられたものが神として  
祭られるまでを、怒涛のような筆力で書きき  
っている。「家出は舟で」は瀬戸内海のとあ  
る島から親の舟を持ち出して家出した十四歳  
の少年とその顛末を窺う二人の少年が主人公。  
ストーリー性よりも少年期の自分でもコント  
ロールできない激しい心理を力を入れて描写  
して独特の面白さがあつた。「嘆きの森」は  
静かに心に染み入るような作品であつた。子  
供時代に亡くなつた親友。四十年後、五十歳  
になつて思う。あのときは聞き得なかつた  
「静かに響く悲しみの声が周りにないか耳を  
澄ます」と。胸打たれる述懐だ。優しき大人  
になつたのだ。「朝光の畑」は史実を丹念に  
調べ、そこにファンタジーを取り入れた力作  
である。宮古島にも戦争はあつた、のである。  
私たち年代の者は宮古の戦争どころか沖縄の  
地上戦さえ習つてはこなかつた。宮古の図書  
館で子供たちに読ませたいと思つた。

これらの五作品がさらに練られていつか

陽の目をみることでできますように。いつそ  
うの努力と書く楽しさを求め続けていた。だき  
たい。  
受賞作一席「猫投祭」(マユーナギー)に  
はただただ感嘆した。架空の秘祭があたかも  
実在するように細部まで構築されていて見事  
である。ほのとしたユーモアも感じるし涙も  
誘われた。今年の「宮古島文学賞」として内  
外に発信できる誇らしい作品である。二席の  
「レモン色の月」も読む喜びを十分に  
味わわせてくれた。長い別々の暮らしの後、  
共に生きることを選んだ母と娘。それぞれの  
誠実な清潔な来し方。比喻表現がふくらみを  
持ち北国の生活が生き活きと伝わってくる。  
母娘の晩年の穏やかな日々が見えるようだ。  
佳作の「島の音」は爽やかな児童文学である。  
音楽と月の光と波の音と美しい少年。サシバ  
とアオウミガメも登場する。南の島の自然の  
豊かな音が豊かな音を奏でることを知った少  
年はバイオリン修行に欧州に旅立っていく。

それぞれ  
の運命を  
素直に受  
け取って  
。  
応募作品  
を読み終  
え、人が  
人ともに  
希望を持  
って生き  
ていく明  
るい未来  
が見える  
ようにな  
気がして  
力が湧い  
てくるよ  
うだった  
。  
「宮古島  
文学賞」  
はこの時  
代にかそ  
けき光を  
放ち人々  
をそれぞ  
れのささ  
やかな夢  
への途上  
にと誘っ  
ているの  
だと思っ  
た。